



昨年の10月に続く、那須光則二度目のSteps 個展である。前回はバルコニーにも作品を展示したが、今回は画廊内で強く主張した。私はその際の評で、頭部という自画像に挑戦すべきだと書いたが、那須は今回も作らなかった。それがいい。批評家の言うことなど聞いていると碌な事がない。作家は何を言われても、頑として自己を主張するべきだ。

今回、那須は画廊内に二体の彫刻と平面を床と壁に展開したインスタレーション《If you're so smart, how come you ain't rich?》(鉄、アクリル、水性ペンキ、ベニヤ)と、事務所に同タイトルの小品を出品した。もし貴方の頭がよければ金持になれる方法がわかるだろうと言われても、このインスタレーションを見て金持になれる訳がないであろうと応えるに過ぎない。那須は、買えない価値を売り出した。

重要なのは、実在しないモデルを元に彫刻を作成したことにある。ここにあるフィギアにはギリシャ彫刻のような理想的な姿よりも、未来派のポッチョーニのような運動が多く含まれている。R・リーフェンシュタールの《民族の祭典》にあるような理想的な姿=ムーヴマン=Mではなく、むしろ暗黒舞踏が持つ、止まっているのに動いている=アティチュード=A が示されているのである。ここに動作であるジェスト=J が盛り込まれると、及川廣信のMAJ理論が完成するのではあるのだが、那須にとって重大なのは、このインスタレーションが絵画でも彫刻でもない「ない」ことにある。那須は両者でもないイメージを生み出したのだ。

